

○

静岡 松浦 辰次

花芽もつ藤に残れる垂莢はうつろとなりてまた下り居り  
夕焼の色しづまりし西海に突き出て青き山の岬かも

○

大阪 松倉 貞夫

二上の山の頂に火ぞもゆる人々つどひ雨乞ひすなり

○

長野 松澤 常毅

山深く入り来て白檜の脂袋つぶして心なぐさみにけり  
這松の根方に雪はのこりつつみ山櫻の咲きさかるなり  
篝火を消していねむかさ夜更けてたまたま水鶏なき居るばかり

○

長野 松島 義治

深山の谷河のみづにひそみ棲む魚もなしとふ温泉の流るれば  
わが宿の庭の莠をうちしぬぎ降りつむ雪のさびしかりけり  
この夜らのこころだらひや湯上りにのみし一杯の酒に酔ひつつ

○

兵庫 故松 本溪園

鹽田の湯

晝の湯にうちひそまりてうつし身の白き腕を見つつ寂しむ

比叡山二首

松木立晝もを暗き石だたみ中堂の周圍廻りて見たり  
さし繁る谷のしじまを鳴きいでし春若蟬の聲のともしさ

吾が病よしとは言はねふるさとに歸り來りてただに嬉しき  
街角の柳の垂り葉みづみづし吾が乗る人力車の幌にさやるも

○

東京 松本 良彦

祭過ぎて人のぼらざらむ部子山に夕べは赤き雲立ちにけり  
三日の休暇終りぬ朝はやき二階の部屋にわれは眼ざめぬ

○

熊本 松井 一郎

幼子に今し尿をさせつればあすの朝まで安寝しなさむ

釋迦院山上

山宿り早朝起きぬたたなはる五家のあたりの山より日出づ

山門の下は谷間の杉木立かなかな蟬が朝をなきつぐ  
山坊の庭に拾ひし縦の實のよごれ洗へり持ちて歸らむ

○

長野 松井 芒人

大島風早崎

切岸に吹き上ぐる風を切りてとぶは千鳥にあらむ細く鳴きつつ

乳が崎

崎山はただに崩れて目下に深青いろの潮たたへたる

野邊山が原を横ぎりて甲斐に出づ

うつせみの命をなげき遠く來し高野廣原青あらし吹く  
風わたる青草原のすゑ遠くつらなる山や低くしづめり

はだらかに雪残りゐる八が嶺をそがひに見つつ行く遠野原

○

長野 丸田 喜代嗣

畑仕事に吾等忙しく姉上の病床の菊しをれけるかも

青年修養會

竹やぶを渡る風音さびしけれ大衆は皆ねしづまりたり

○

長野 丸田 嘉雄

忙しくて今朝は玉子をとらざりき夕去りて取るに籠に餘りけり

妙高山

霧の海たまゆらされつまそかがみ野尻の湖は見えにけるかも

秋山行

三國峠うち越えくれば毛の國や頭の上ちかく雷なりにけり

○

京都 馬留 茂十

土田先生に見ゆ

棚にして石油こんろが置かれしは師が朝夕に焚き給ふならむ

歸省

故郷のわが家にして雪どけの水の音きけば心したしも

○

長野 丸茂 傳一

石の上に寒天草竝べ干してあり釜無河原水とぼしけれ

夕小田に畦塗<sup>つち</sup>り居れば風吹きて露<sup>つゆ</sup>の藁<sup>わら</sup>より絮<sup>わた</sup>まひ立つも

○

東京 丸 茂 濱 子

夕つ日の光とどけばくりやべに酢もみ胡瓜のにほひ漂<sup>たぐよ</sup>ふ  
唇<sup>くち</sup>にあててふくらませつつ大葉<sup>おほは</sup>子の苦<sup>く</sup>き汁<sup>じ</sup>かも心和ましむ

○

長野 丸 山 信 一

霜あとの桑の芽いまだ整はず畝<sup>あぜ</sup>間に馬鈴薯<sup>いも</sup>の花咲きつぐに  
草脊<sup>せか</sup>負<sup>か</sup>ひて下る馬あり路のべのすすきはあらし音たつるなり  
深ぶかと朝霧こむる澤道に栗の實落つる音をききたり

○

長野 丸 山 東 一

亡母入院せし頃となりて

夜ふけてたまたま思ふことのありうがひの水を呼ぶ母のこゑ

短命の吾兒を葬むる

埋葬の許可證ふところにしていそぐみ寺の庭に櫻咲きたり

大平峠越

木曾へ越す峠の路に藤の實の青莢<sup>あざな</sup>垂るるもぎとりにけり

童馬山房

焼け跡の夏草むらのしげみには焦げ崩れたるものぞ猶立つ  
細びきを窓より張りて病む人の衣干してあり夏草の上に  
焼け跡にしげりて深き夏草の中に茄子<sup>なすび</sup>はつくられにけり

肌ぬぎて物書き給ふ見れば尊し先生の胸毛白くなりつる

○

秋田 三浦 傳治

山路来て見上ぐる樟の梢なる大鷲の巢に夕日のあたる  
雨霽れし木ぬれは鳥の囀りてたそがれ明りなほありにけり

○

長野 三浦 政廣

近きうちに天氣變らむ向う家の狂人金作ののしる聲する  
柴刈の山ゆながむる駒ヶ嶽御嶽乗鞍山の上に見ゆ

○

宮城 三上 久四郎

栗駒の峯の青きにおもおもと天のはらより雲下り来る  
尿して歸らむとする小夜更けに大日岩に月かたぶきぬ

○

大牟田 右田 邦夫

夜の汽車とどまりにけり入りて來し人の着物に雪かかりをり  
雪の凝る電車通を歩み來て何か寂しくひきかへしけり  
谿水の溢るる道にしましくは息をこらして足を冷せり

五家莊行

谿川のたぎちも蟬の鳴く聲も一つに響む谿に入りゆく

○

東京 三木 耕佐

ぬばたまの梅雨の夜空を啼き過ぐる夜鳥の聲をききとめにけり  
 故さとの家にかかれる色づきし古き時計を今宵思ふも

○

長野 三澤 孔文

教室の窓に吹き入るポプラーの絮實いぶせき夏は來にけり

薩摩吹上濱

砂丘にならぶ磯馴の松ひくしくぐりてゆけば白浪の音  
 船あげて人等去りたり朝日さす浦回につづく潮さるの音

伊作温泉

疊の上におちたる蟲を掃き出だし今宵を寝む心安けし

○

吉林 水野 司 藝留

伊勢神宮に詣でて

口すすぐ御裳裾川の水は清く小鮎つどひて岸を泳げり

東京より吉林に赴任の途汽車中にて

吾が生れし近江國原雨しげく湖光れるを見つつ過ぎけり

○

東京 水野 俊夫

大正十五年十月十七日鳥木赤彦先生の御墓に詣づ一首

榎の木に集る小鳥さわがしくみ墓の前に目をとぢにけり  
 六尺桶の箍にかけおく油燈のほのほはとぼる煤たちながら

朝鮮 溝間 操子

○  
 かすかなる光をうけて石室の石の破れ目にあざみ萌え居り  
 ぬくもりの籠る眞土を掘り返し去年のダリアの根分けするなり  
 歸り來て夫がつりたる垂れ蚊帳の低きがままに吾れは寢にけり

○

東京 水戸 季子

○  
 草原を夕陽あびつつ土運ぶ馬引かれつついななきにけり  
 満潮にうち上げらるるこまか魚熱砂の上に長くは生きず

○

長野 三村 春子

震災地に在す師を偲びまつりて一首

遙けさを思へばいたもすべなけれ地震すぎてよりまだ便りなし  
 夜ごと見るふるさとの夢よ幼くてあそびし友の姿そのままに

○

東京 三室 達丸

○  
 岩清水ながれて涼し石段のぬれしを登るころすがしさ  
 向つ家の屋根の高さに縁側をいざり出でつつ月を見るなり

○

長野 宮川 胤人

父上州萬座温泉に病を養はる

○  
 温泉に近き白根の山の麓まで雪來しといふ御文とどきぬ

想田積司を訪ふ

雪の上をひとつとび行きし野兎の足跡見れば山深く來し

○

大牟田 宮崎 高

亡兒を憶ふ

あかき錢一つ手にもち店頭みせさきに購かふすべしらに泣なきし子ころはも

肥後五家の莊行

谷川のとよみききつつ山行きて一日はくれぬ明日またゆかむ

○

長野 宮崎 勝 彌

高原の晝を流るる霧深み教室がうしやうにをり寒さをおぼゆ  
夕ごとに踏みつつ歸るこの道に草萌え出でて春さりにけり

○

長野 宮澤 進

飲水のしみづを藥罐やかんにつめて今日をしも山の畑はたけにきたりつるかも  
日盛りをこもりてをれば折々せりせりに人きて井戸いどに水汲む音す

○

山梨 宮澤 零 洋

傾ける富士の裾野すそにうねり合ふ落葉松かろうまつの山杉檜やまの杉のひのの山  
富士が嶺たかねの中空ちゆうくうに絶えず動き合ひ山を離れぬ雲のかしこさ  
たまたまに雲吹きおろす富士の裾落葉松山も湖うみもかくろふ  
足曳あしひきの山腹やまはらづたひ霧下りて裾野一つの色にけぶれり

○

長野 宮下 柴 門



一日にて見榮え劣れる罌粟の花種子の目立ちてあるがともしさ  
雑草のおどろおどろに茂り合ふ中に茅の穂は出でにけり

○

長野 宮本 松雄

蟲の音もなかずなりつつ夕ごとに山の時雨のここに吹き来る

十一月二十三日故師墓参

御墓にのぼる小徑の畑のべの莠草あらくさ枯れはてにけり  
ぬかづきてをろがみ居ればあわただし櫟落葉にみぞれ降るおと  
御墓邊をかゆきかくゆき吾が居れば萱負ひて人の言葉かけゆく

○

横濱 宮脇 武夫

雨過ぎし春土の上に解りたるばつたは飛ぶも別れ別れに

失明して家に籠る

秋まひるやはらかき石とかたき石交々けづる音きこえ来る  
今行きし寒紅賣の袋路を歸り来るらしだみ聲にして  
生れし子は皆飛び去りて蜂の巢の空しきを手に持ち居たりけり

○

長野 向山 ちはる

荒雲の過ぎにし後の仙丈は眞白き雪の山となりけり  
松が枝に積りし雪の落ちぬほど凍つよくして夕暮れにけり  
見とほせば遠き原なるこの道を父母と歩みし昔こほしも

○ 長野 向山 雅重

昭和二年六月二十六日父急死

胸にこもるぬくみは我に覺ゆれど生命生きざる父を如何にせむ  
 附木箱に手拭しける箱枕今日のひるねをここにいませし  
 家族どちの寢息しづもる部屋ぬちにも言はぬ兄と父を守るも  
 とことはの別れと思ふ椀には瓶詰の酒も入れまゐらす  
 奥津城に供へまゐらす花筒と藪の青竹筒に伐るかも

黒川溪廣河原小屋

亡き父が木樵り木流し働きし深溪の小屋に一夜寢にけり

○ 東京 村田 利明

土あれし庭のおもてにおとたてて霰たまりつつ朝明けにけり  
 嵐あと往來たえたる裏みちに遠くより犬のひとつあゆみ來  
 雨だれの間遠におつる夜やふけしちかくの家門とさすおと

磐城小名濱

磯街のはたてかざりて入つ日のこもれる山や雲かとぞおもふ  
 海につづくこの村の家ひくくして晨ひととき雀むらがる

○ 大牟田 村山 直藏

肥後五家莊行一首

嶺高くおし照る月のかげ充つる野風呂にわれも行きそ浴びなむ  
 店しまふ間際になりて思はざる商ありぬ安寝はやせむ

○ 長野 持田 三郎

向山に月は上れり峽間路の小松が下は照り出だされつ  
若葉もるひかりさやけき山路を蟬はしきりに鳴きとほるなり

○ 山梨 望月 閻

叔父が来て幾日かここに描きたる此の胡桃の木葉は繁り居り  
藤の花散りてこぼるる下土に集くふ熊蟻出でて歩むも  
此の夏も過さむと思ふ山の家垣根に葛のつるからみ咲く

○ 長野 本山 弘治

上州萬座温泉

山の宿の一夜は明けぬ起きいでし目にしむるごと湯霧せまり來  
いちじるく湯の香立ちつつ朝寒し水汲む男谿へ下りつ  
山の氣の身にしむ曉や谷へ下りて土瓶に水を汲みかふるなり

○ 京都 百瀬 綾夫

一つ瀬の川を下れば青萱のしげみの上になびく穂が見ゆ  
たたなはる磯岩かげの潮たまり砂ふみ來し子等足を浸せり

○ 長野 森下 住人

八ヶ岳登山

雲の海今か離るる日の赤さおのづからにして居住を正す

峯一つのやうやく越えて息づきぬ汗冷々と背中を傳ふ

○

朝鮮 森路 草坪

秋深きこののみ山に風こもりそこはかとなくせまる音あり  
冬近みひろ場に乾せる松毬はしぐるる山より人の採り來し

病牀雜詠

月越えて我れ起きたたずいささかの熱ぞと人に言はるる寂しさ  
硝子戸に氷雨ふきつくる日もありき吾がこの室に病みそめし頃  
とのゐ室に寢床しかせて五十日まり熱をこらへて勤めしものを  
春過ぎて夏にい向ふけはひさへ心弱れば身にしみるなり

○

東京 森本 治吉

いで湯より歸り來りて徴ふきし枕を干すも庭の日向に

職を轉ぜられて武藏野天沼に移る

野の家に妻と住みつつ曉に遠く聞ゆる雞のあはれさ  
日もすがらほこり風吹きしくしくと耳の奥痛む五月となりぬ  
今日も妻といさかひにけり小夜床に頭疲れてい眠り難し  
吾が妻の眠るま夜中に起き出でてものを思ふは安らけきかも  
たまさかは和むことあり連立ちて庭の隅處に塵穴掘るも

○

長野 森山 汀川

夕されば庭に下り立ち鎖す木戸の雪さしみして鳴れるその音

朝飯は煮あがりつらむそそくさと妻は障子を拂ひそめたり  
朝床に眼ざめてあれば時すぎて飯も冷えぬと言ふ聲のすも

兄の家にて

釜無の谷間をせばみまさやかに冬晴の日は射しそめにけり

赤彦先生を偲ぶ

まれ人の左千夫翁を泊め置きてひよこはぐくみ暇なかりけり  
眼鏡二つかけしおきなを先立てて高木の丘に君と登りし  
いささかは酒うましとぞ酔ひ足りて物語られぬ舌もつるるに

三峰下山獨り雨中を秩父驛迄歩む

夏安居の果てし夕べにたのめなく雲押し垂れぬ降り出でなむか  
今宵もか雨降り止まば佛法僧鳥枝移りして高鳴かむかも

この幾日こもりし山をかへり見てもはらに寂し汽車たたむとす

○

長野 兩角 溪月

庭桐の根元によれば空冴えて霜になるらし夜は更けにけり

○

長野 兩角 榮

よもすがら降りける雨は明け近く雪にかはりてひそまりにけり

蟲生温泉

横雲に紅き入つ陽映ゆるなべ居多の濱遠く閑古鳥鳴けり

○

豊橋 兩角 千代子

## 子供登校二首

降りしきる雨風の中を追ひゆきて涙をぬぐひゆかしめにけり  
 道端に立ちて見守る母我をふりかへらずに角をまがりぬ  
 入院の夕べは寂し深々と白ぶとん着て子は眠りたり  
 途中より耳遠き子をかへすなり左の端を歩み行く見ゆ  
 雀子が稚木ながらに來て鳴けば庭木らしくもなりにけるかな

○

長野 兩 角 福

## 日光遊草

紅葉せる山のはざまに烟立ち護岸工事の事務所ありけり

## 松島遊草

此の島の松の木叢こけらに校舎ありて晝の休みか兒等騒ぎ居り

○

静岡 柳 本 城 西

## 舞阪一首

この雨に自轉車のせてゆく舟あり一里の海を新居あきみへわたる  
 山鳩にしてはさやけき鳥が音や來こしくもしるし春の山道  
 梅雨つゆの夜のおぼつかなくもてる月に一しきり啼く蚊吹鳥かふせどり遠し  
 山吹のただ一つ咲く返り花ゆふべつちみづ夕打水ゆふべつちみづにちれるあはれさ

○

長野 屋 敷 頼 雄

大正十五年十二月廿三日夜雪雷を聞く一首

ゆき雷のおどろおどろと鳴りわたる夜空を壓して雪つもるらし  
雪つめば外にもあそばずなりにけり炬燵の吾子が霜やけ赤頬  
積みあげて檐よりたかき雪のやま町をとほりの道せばまりぬ

昭和二年十一月三女眞咲逝く

朝牀に息ははてたるみどり兒の母とならびて寝てありきや  
家低き雪の上の道ゆふさりて人こそ知らね吾子の柩ゆく

○ 東京 矢島 祐利

母と木曾御嶽に登る

まれまれにわがたらちねと旅をする心やさしも夜汽車のなかに  
うちわたす青草山のすがすがと此處に草鞋をはきかへなむか

わが村にいくたりの人死にゆきし話聞きをり山道にして  
山あひに採りて來にける白雪を噛みてすがしむ汗あえながら  
小屋の中にうどんを食ひて居りながら山の狭霧は流れて寒し

○ 宇都宮 安見 正

雪白き男體白根見えぬ日は心さびしく一日すごすも  
ちちのみの父の植ゑたる百合の花を賣らむと思ふ今日は寂しき  
ちちのみの父みまかりて荒れし畑一人耕し父ぞ戀しき

○ 兵庫 安井 俊二

目につきて木梢色づきほの赤し彼岸櫻も咲くにやあらむ

電燈を低く下せば灯をめぐり大き蛾のまふ宵とはなりぬ

○

長野 柳澤 信繁

夕づけば水田につづく雑木山葉裏反して風のぼる見ゆ  
夜くだち一人湯槽につかり居りもはらに寂し身を洗ふ音

○

長野 柳澤 建男

舊宅の跡二首

吾が生れし跡をし訪へば寂しもよ屋敷は人に桑植ゑられぬ  
日向べに細々たるる舊屋敷の清水を見れば昔偲ばゆ  
雨霽れし庭の緑を病む父に障子を開けて吾は見するも

○

長野 山岸 耕村

友去ればいたく静けき室のうち看護婦は來たりて炭つぎにけり  
月讀の光さやけみ吾があゆむ庭の外なる畑に蟲なく

○

長野 山極 二郎

吹雪して今朝は船なき川筋にかかる橋のみいくつも見ゆる  
千々石の灘の光るが見えにけり静かなる朝の峠越え來し  
風頭の丘の松間に照る月を見せむと思へど子ろ寝につきぬ

○

愛知 山口 赤壺

永平寺承陽殿一首



ひたすらにしたひまつればまのあたり道元禪師生きいますなり  
くろぐろと夜空に聳ゆる高山をひとり見て居り二階の窓に

先考十七年忌

誰一人通夜する人も来てくれずわれら兄弟寄りて歎きし  
今はかもひとりなる母よこれの世に命はながく生きませと祈る

○

福岡 山口 覺 郎

やうやくに山のせまれば深溪をへだててきこゆかなかなの聲  
雑草の實はそよ風にふきこぼれつぶさに浮けりゆるき流に

○

門司 山口 繁 敏

いきどほろしき心遣りかね遠く來しこれの山路は雪解の道  
ぼつかりと小池の面に魚浮けり一途の心つかれけるかな

○

東京 山口 茂 吉

憶亡妹

いもうとが肌身につけし守護札汽車のなかより川に流しつ  
妹がくすりに焼きて食ひしとふ赤き小蜻蛉はむらがり飛べり

小佛峠を越ゆ

峯づたひに吾の越えゆく小佛のふかき峽間に雲しづむ見ゆ  
しづかなる夜半にのぼり來し山の上の走井の水を掬びて飲みつ  
眞十鏡照れる月夜に山越えてここに流るる水わたるかも

## 霧島山一首

福岡 山崎 眞吾

みんなみの國土はてにそびゆるや開聞岳は雲のなかに見ゆ  
 天津日の光は照れりいくつもの雪の檜原をこえにけるかも  
 あたらしき磯藻のほひこもりたる嵐のあとの家に坐れり

○

京都 山田 猿吉

開け放つ疊のうへに深くさす晝の日ざしも寒くなりにし

## 奥丹地方大震災

假小屋のまはりに萌えし短か草牛を牽きいでて食ましめにけり  
 乏しらの焚火にあたり家族らと語るはさびし生きのこりつつ

○

東京 山田 武匡

夜更けて静まりかへる護國寺の御堂の前にならぶ灯あかり  
 戸をしめて人のかへれば静かなり只一人なりと思ひつつねむる  
 過ぎにける念寂けし古里の小泉の山に妻連れて來つ

○

長野 山田 良春

吾が宿りし深谿こめし朝霧の晴れゆく見れば雪の山近し  
 新しく家もたしむる弟に今宵つくづくもの言ひにけり  
 酸素吸ひてなれの顔色よくなれり此の儘にして明けに至れよ

○

和歌山 山中 三郎

月夜空ひむがしにして山脈の見えわかぬまで雲たむろせり  
 日の本の軍艦かも列なして今し過ぎ行く紀伊水道を

○

長崎 山根 浩

郷におく妻戀ひ居れば黒谷の鐘鳴りひびき夕ぐれにけり  
 戸にあたる霰もまじるしぐれ夜は人戀ひごころ堪へがてなくに  
 かきくらし雪ふる河原に焚ける火の焰色あかし燃えあがりつつ

○

長野 山邊 深美

三峯山にて二首

山道に並びて高き杉檜羊齒生ふる椽を仰ぎ來にけり

もろ國の人等集ひて三峯の神のみ山に神酒いたたくも  
 他人の田となりて久しも此の畔を幼くてわが稻はこびせし  
 とことはに我が家の田とはなり難し茂りてなびく美稻の色

○

新潟 山本 一郎

床の上にあぐらして吾は歳とれり鹽鮭の骨を白湯にひたしつつ  
 長病みにこもらひをれば我が家の豚ふとりきと聞くも嬉しき  
 向山ゆこゑ透りくる鶉鴒はあらはの桑の梢にをるなり

○

大牟田 山本 和夫

霧島登山

みんなみの國のはたてか海の上に開聞岳の裾かすみたり  
雲仙のいただきゆくづれくだる雲ひろごり垂りぬ海原の上に

憶山口好

この近く君のみ墓のあることをたまさか思ひ出でてさびしむ

○

京都 山本 正 東

麗日にふと壺の河鹿見たくなり蓋を明けしに眠りてをりぬ  
春去りて再び壺を取り出せば敷きし葉の上に河鹿動かず

○

鹿兒島 山元 藤之助

幾度か空へ舞ひつつ白鷺は渚蘆生に下りにけるかも

さ夜嵐明くれば晴れてわが庭の黒土の上に梅ころがれり

○

上海 山本 初枝子

霧こめて外面は見えず我が夫の船も今宵は歸らざりけり  
花びらは雨に流れぬ蘆ばかり庭のかたへに掃き寄せにけり  
夜おそく釘うつ音の聞こゆなり隣家に今日人の移り来て  
なつめの實足にはさみて飛びされり薄紫の色したる鳥  
小鳥追ふ鴉の聲のかしましさを書よみさして庭に出でけり

○

名古屋 山本 三千雄

いとけなき頃をし思ふわが妻と落葉にまじる栗拾ひつつ

裏山に栗拾ひせしをとめ子を年へて今は妻と呼ぶなり  
わが窓にさはるばかりに雪積みて竹の葉群はしだりかかれり

狂院の弟を訪ふ

弟のふところの中を見てやればバナナの皮がいでて來にけり

○

兵庫 山本 良男

濱子等は濱に下り來つ静かなる釜屋に鹽の煮えたぎる音  
まむかひの松山出づる月清し溪をはさみて匂ふ白梅  
蟬のなく聲しげき竈端の土間にさやかにさす月のかげ

○

大津 湯木 倭文子

母逝く一首

泉水の緋鯉を吾子に見せてをり聲立てて吾は泣きゐたりけり  
静かなる今朝の雨かな池水の濁らぬ底に魚遊ぶ見ゆ  
病癒えし吾子歩ませて出でて來し公園の櫻花散りてをり

○

長野 湯原 淳

向つ峯を山鳩のなきこの峯にはほととぎすなく若葉繁山  
さゆらげる篠竹のかげを寫したる障子明るく月さしにけり

○

山形 結城 哀草 果

みふゆつき春さり來れば小山田の畔越す水の音たかまりぬ

東京に降りたる雪はまたたくま巷ちまたの泥となりてとけたる

葬場殿一首

檜ひの皮かわのみ屋根にほひて春の日の照れるがなかに民ら嘆けり  
走り出の水ながれゐる山道に澤蟹さわかにの子のかくるるを見つ

越の海

潮騒しほざわのどよみながるる磯岩に鴉からい群れて飛び交ひにけり  
磯山のふかくめぐれる内海は夕日をうけて波の音もなし  
海原のはたてに沈む入津日いりつひにこゑをあげたり山人やまびとわれは

福井市吉田正俊君一首

ま夜なかに汽車は着きたり手を高くあげて吾を呼ぶよき友の顔  
牛を追ひてゆく秋の野に日は照れど蝗いなせは飛ばずなりにけるかも

白膠木の實鹽ふきたるをかなしみて入日のさせる秋の野を來し

○

福岡 結城 冬彦

北空きたぞらに少しかたむきそそりたつ香春かばるが岳に月さしにけり  
ドラッグの廣告人形踊れるを人ごみに居てわれもみてをり  
ゆき疲れ傘の手かへむとどまれば眼鏡めがねの曇くもりもわびしかりけり

○

長野 油井 夢人

家裏の笹竹ささたけに音して降る雪の夜更けてなほも降りやまぬらし  
うららかに陽のさし和なごむ山畑に麥ふみ居れば鶯うぐいす鳴くも  
刈敷かりしきを散らしつつ居れば吾子も來て水田のなかに入りて遊べり

長野 横内 奈保子

久々に雨降り出でぬうから達雨降祝何かつくらむ  
足の裏冷き頃となりにけり腰掛の上に坐りて書くも

北海道 餘湖 真砂路

木原路盡くる即ち海ならし真近に聞え來潮寄る音  
瓦斯の灯の光ともしき船板にはねあがり居り今釣りし烏賊

山形 横山 梅流

春に向ふ山の雪崩はしきりにて村にお觸の今宵まはりぬ

夜間演習

さ夜更けし野邊を遠くの銃の音間もなく止むは斥候戦か

横尾 健三郎

丘の畑の麥の青き芽土に伏し此の朝しるく霜置きにけり  
くろぬりて水落したる春小田の稻の刈株陽に乾きけり

東京 横尾 光子

鏡馬

まのあたり今かけすぐるもろ駒の専心の眼はかなしきものを

母校の廢園に立ちて

乏しらに擬寶珠の花咲きむたりこのあれ園に懐ふこと多し

ここに於て愛しきことをいひたりし幼なき友をいつか忘れむ

○

函館 吉川 鐘三

たまさかの休みを友と風呂に来てせなかの垢をながし合ひつる  
ほととぎすまひるまもなく高原に葉露たもてる鈴蘭の花  
高原にあまねくさける鈴蘭の花の葉露にぬれにけるかも

○

長野 吉澤 清

父のため湯をたてにけり薬草を春の雪解の山にさがして  
身ごもりし馬に冬田を鋤かして心わびしく物言ひにけり  
産屋戸のけながき妻と相共に寝なむと思へど心しづめつ

○

長野 吉田 貞

生垣を越えてはるかに丈伸びしダリヤに花は少かりける  
真夜中に厠に起きてたたずめり十五夜の月真上なるかも

○

東京 吉田 正俊

三峯安居會の歸途哀草果氏に従ひ大宮に遊びぬ一首

時ありて出づる訛を聞きかへし君に従ひて樂しかりけり  
轉寢より覺て涼しき何時の間に雨となりぬらむと窓を閉めつつ  
弱りたる身體にこたふ蟬しぐれ道の木蔭に入りて憩へば  
晝寝あとを白蓮の咲く沼すぎて錢湯にゆくを樂しみとせり  
金ためて母の墓石たてなむと我の願のかすかなるかな



横須賀 吉田 正敏

潮引きし濱邊に下りて砂掘りぬ熱き湯湧くに興がりにつつ  
夕さりて雨やみにけり朝顔の鉢にたまれる水を流すも

神戸 吉屋 壽

わがために母が挽ぎ来てたまはりし柿の蒂には雪かたまれり  
外の面には木枯の音さやげども月の光は部屋にさしゐつ  
自動車のとほりすぐるときわが足に強き火照を吹きつけにけり

甲府 和田 保造

夜となれば圍爐裡火かこみしもべどち足の鞆をこそぐりてをり

愛媛 和田 草風

この朝凍てし油をとかすべく土間にすみつき火をおこしけり  
晝たけて仕事場の中いやあつし窓をひらきて油揚あげぬ

久々に歸りてみれば田植するふるさと人は年老いにけり

愛知 脇田 静邨

あかときの冷えのしるきを氣づかひつ寒暖計を起きて見にけり  
縁先に這ひて來れる夕顔の蔓先すがしこのままに置かむ

大阪 渡邊 木朱

雨あとに青き落ち柿砂つきて掃き積まれたり朝の路べに  
足曳の紅葉の山に鐘なりて夕靄低くたれこめにけり

○

京都 渡邊 晋

雲の上に煙の影を長くおとしこの驛路に汽車のとまれり  
二階より見馴れし比叡比良の山一年ここに過しつるかも

○

長野 渡邊 渡利

故里の山葵畑に父と吾と晝げたらうべて心たらへり  
故里にひとりこのこれる妹の幼きおもわ目に見えてくる

○

長野 渡邊 彦治

新墾のこの道筋はかたまらず轍のあとの深く残れる  
向つ丘のまろき草山萌えにけり檜の小林つづくこなたに  
杉むらは光通さずどぐだみのま白き花のにほひこもらふ

○

神戸 井坂 小夜子

わが街の背山の黄葉いろ冴えてこの頃寒き風吹きにけり  
二瓶悦子様の渡歐を送る

八重潮のはたての國もなにかあらむ夫をたのみて君行かすなり

播磨別府港

沖にみつる船つぎつぎに歸り來てわが立つ磯にみな帆をおろす

三峯山

○ 徳島 井坂 吉惠

身に沁みて寂しさをおぼゆ佛法僧鳥書院ま近き木立にて鳴く  
高やまの峯に宿りておもはぬに佛法僧鳥の聲を夜ごとききにし

○ 福岡 井上 光二

大正十四年九月霧島登山

喘ぎつつ吾がよぢのぼる馬の脊のなだりは深く谷にいたれり

榮の尾温泉

山宿の朝息さむし含嗽する水は硫黄の香をふくみたり

長崎行

夕日光うするるなべに竝みよろふ山の上まで灯のともりたり

○ 東京 井上 幸子

鐵瓶に湯氣をたてつつ籠り居り寒紅賣のこゑすぎにけり  
たらちねの母と妹がかざりゐる雛みてをり病みこやしつつ  
たまさかに夜店見に来て夕顔の苗を求めぬこの人ごみに

○ 福島 遠藤 時雄

ぬば玉のよべの嵐はいちぢるく清菜の上に松葉こぼせり

歳暮の贈物を持ち行く一首

鹽鮭を手さげて急ぐ野路はるか朝日照りたる妹が家見ゆ

山峽の棚田を落つる寒水のほそき水口みな凍りたり

○

東京 岡田 いく代

浄土宗廣閑院お十夜の法會一首

かりそめにみ寺の境内に住居してけふの法會に逢ふがかしこさ  
暮れ切らぬみ空にうつり裏山の木々の木ぬれのかそかに戦げり  
いかづちの鳴りどよもして降る雹にいたく散り來も櫟の若葉

○

東京 岡田 清

する墨の硯に氷る朝寒し炬燵に居れば啼く百舌鳥の聲  
此の幾日雪ふり積りふり積り隣屋の灯見えなくなりぬ

○

大阪 岡田 眞

汽車の窓に睦月十三夜の月寒し伯耆大山の雪光る見ゆ  
先生の國のあたりと思ほゆる背面の山に雲たたまりぬ  
閑かなる障子明りは狭庭邊につもれる雪の映りたるらし  
木蓮の蕾が映る白壁の光さむけくおもほゆるかも  
庭のへにいくつかまろぶ青梅にいま落ちし實が交らひにけり

○

長野 小澤 菊 彌

北アルプス山麓

日の當る雪の山路に酢をふける白膠木の木の實を寂しく食めり  
ふか谿谷のなだれの音のものすごさ獨おびえつ吾れは來にけり

八ヶ岳に登る

山かげの大き岩より滲み出づる眞清水したたる青苔を濡らして

諏訪湖岸水死女

みづらみの朝あしたのなぎさにわかき女は藻草をつかみて命死に居る

○

長野 小野 三好

うつりゆく日なたをもとめ物を乾し冬の一日ををしむわが妻

小湯の上に寓す

わが家の門への逕みちは細くして野良へ行く人朝々通る

わが家の裏べの畑へ夕ぐれて雲ありくるはしづかなるかな

庭先の草むしりつつつみとりし薺なづなたんぼぼたうべけるかな

老父燕嶽に登る

つばくらの山ゆ歸りしあくる日に田の草とるといでます父は

○

福岡 小原 節三

松の木の幹みきのほかには見ゆるなき林の中をわがあゆみをり

しづかなるこよひの雨は海原うまの波のうへにもふれるなるべし

波の音たかしと思ひぬば玉の闇夜の磯にいでて來にけり

春の日の日ざしあかるき柴山の細木ほこの中に小鳥うごくも

赤き日は波まに沈みゆきにけりくらくひろらに海原はあり

雨かかる黒板塀すきまのすきまより杉菜すぎな若莖わかこのびいでにけり

愛知 小穴 京 作

思はぬにふたたび見つる湖の藍深くして行き過ぎがたし  
眼をすゑて母が目守るを感じつつしどろもどろに飯食みて居り  
杉の木に十六夜の月のぼりたり庭に音して雨降りながら

○

静岡 小川 奈雅 夫

富士六合目一首

岩室の夕餉の菜の麩の汁とわらびなりしもしたしかりけり  
馬返しうまがへしの棒杭見つつ水筒の水呑みをれば鶯啼きぬ

○

栃木 岡 健 吉

寒風さむかぜにさざ波立てる川の面白き藻の花咲き出でにけり  
森深く我は來りて獵銃の赤きケースを見出でけるかも

○

東京 岡 麓

ねそびれし孫を抱きて望の夜の月を見にけり光くまもなき  
望の夜の月くまもなし小夜ふけて妻とわれとが孫をあやすも  
ものいひのおくれし孫が片言をきき惚ぼわたり月を見ながら  
十六夜の月はのぼれどまだひくし横間の空に稻光いなひかりする  
さし上る月の光をこはがりて後じさりする子のいはけなさはも  
世間の道はすべなし孫をすらふりすてねばと嘆く頃かも  
月の光おそるる汝なれはあはれなりいかに育ちて人となるらむ

二階家の肘掛窓によりてをり逸れてのぼりし十七夜の月  
 この秋はひるま雨ふりゆふべやみ夜ごとに月のひかりさやけさ  
 秋の夜の夜ふかき月に息づけり何の遠慮もなきおもひして

○

山口 岡村 武子

笹のゆきの雫しそめし藪かげに傘さしながら露の藁摘む  
 芹つみて濁るほどなく澄み透るいささ川水ながれはやしも

○

長野 丘村 比呂人

据ゑ風呂のせまきが中にひたりつつ馬が飼葉をはむ音をきく  
 うからどち集ひて食ぶるとろろ汁心欲りしほどうまくはあらず

○

名古屋 岡山 利一

家裏の杉の木末に朝鴉啼けるをきけばけうとかりけり

○

札幌 荻野 馨

寒空に楡の樹の葉のちりはてて黒き木梢に大き集見ゆる  
 みぞれふる黒板塀の上にして酸漿の實を鴉つつき居り  
 手稲山登りて來れど雲垂りて我が友の死にし山は見えなくに  
 春の雨しとしとして稲株のならば田の面に今日も降り居り

○

京都 小國 宗碩

このままにおとろへずともいつの日か胸の病に遂に死ぬべし

小供等が昨日摘みにしつくづくし縁の日向に干からびにけり  
 夏草のつゆけき徑をわけゆきて麻のころもの裾濡らしけり  
 時によりて言葉やさしくふるまへばくみしやすしと我を思ふか

甲斐行脚の折二首

右左口の峠をくだるみちすがら笠に莓をつみためにけり  
 山人は心のどかに住むものか谷の流をのむ水にして  
 夕餉あとのそぞろ歩きにゆきにけりダリヤの花の咲く處まで

○

愛知 尾崎 哲也

夜もすがら身まかりし人を歎きけり庭の面しろき今朝の霜かも  
 春ながら遠いかづちのひびく夜は小田の蛙も鳴きひそむらし



昭和四年五月五日印刷  
昭和四年五月十日第一刷發行

アララギ年刊歌集 第四  
定價壹圓五拾錢

(片山製本)

版權所有	

編輯者

齋藤茂吉

發行者

東京市神田區南神保町十六番地  
岩波茂雄

印刷者

東京市神田區表神保町十番地  
前田宗松

文成社印刷

發行所

東京市神田區  
南神保町十六番地

岩波書店

電話(35) 二二八〇番  
二二八二番  
二六二六番  
二六二四番  
東京 二六二四〇番  
銀座口座

書叢ギララア

第一編	島村憲吉著	馬鈴薯の花	古今書院發行 定價一円八十錢
第二編	齋藤茂吉著	赤光	春陽堂發行 定價一円三十錢
第三編	古泉千樫著	屋上の土	改題 定價一円五十錢
第四編	島木赤彦著	切火	品
第五編	齋藤茂吉著	短歌私鈔	品
第五編	齋藤茂吉著	續短歌私鈔	品
第六編	中村憲吉著	林泉集	春陽堂發行 定價一円八十錢
第七編	齋藤茂吉著	童馬漫語	春陽堂發行 定價一円五十錢
第八編	島木赤彦著	氷魚	岩波書店發行 定價一円五十錢
第九編	長塚節著	長塚節歌集	品

書叢ギララア

第十編	齋藤茂吉著	あらたま	春陽堂發行 定價一円四十錢
第十一編	伊藤左千夫著	左千夫全集	品
第十二編	松倉米吉著	松倉米吉歌集	古今書院發行 定價一円五十錢
第十三編	土田耕平著	青杉	古今書院發行 定價一円八十錢
第十四編	石原純著	日品	切
第十五編	中村憲吉著	しがらみ	岩波書店發行 定價一円八十錢
第十六編	島木赤彦著	歌道小見	岩波書店發行 定價一円五十錢
第十七編	アララギ所編	灰燼集	古今書院發行 定價一円八十錢
第十八編	島木赤彦著	太虚集	古今書院發行 定價一円二十錢
第十九編	村上成之著	翠微	古今書院發行 定價一円五十錢

書叢ギララア

第二十編	土屋文明著	ふゆくさ	古今書院發行 定價二円三十錢
第二十一編	島木赤彦著	萬葉集の鑑賞及び其批評	岩波書店發行 定價二円
第二十二編	岡 麓著	庭 苔	古今書院發行 定價二円五十錢
第二十三編	島木赤彦編	大正十三年度 アララギ 年刊歌集	岩波書店發行 定價一円五十錢
第二十四編	アララギ所編	故人歌集 1	近 刊
第二十五編	齋藤茂吉著	つゆじも	近 刊
第二十六編	齋藤茂吉著	金槐集私鈔	春陽堂發行 定價二円八十錢
第二十七編	齋藤茂吉著	良寛和歌集私鈔	近 刊
第二十八編	齋藤茂吉著	童牛漫語	近 刊
第二十九編	アララギ所編	故人歌集 2	近 刊

書叢ギララア

第三十編	平福百穂著	寒 竹	古今書院發行 定價二円二十錢
第三十一編	藤澤古實著	國 原	岩波書店發行 定價二円六十錢
第三十二編	島木赤彦著	柿 蔭 集	岩波書店發行 定價二円
第三十三編	アララギ所編	大正十四年度 アララギ 年刊歌集	岩波書店發行 定價一円五十錢
第三十四編	アララギ所編	故人歌集 3	近 刊
第三十五編	岡 麓著	歌話 代々木雜筆	近 刊
第三十六編	中村憲吉著	歌 集	近 刊
第三十七編	アララギ所編	大正十五年度 アララギ 年刊歌集	岩波書店發行 定價一円五十錢
第三十八編	結城哀草果著	山 麓	近 刊
第三十九編	高田浪吉著	川 波	古今書院發行 定價二円三十錢

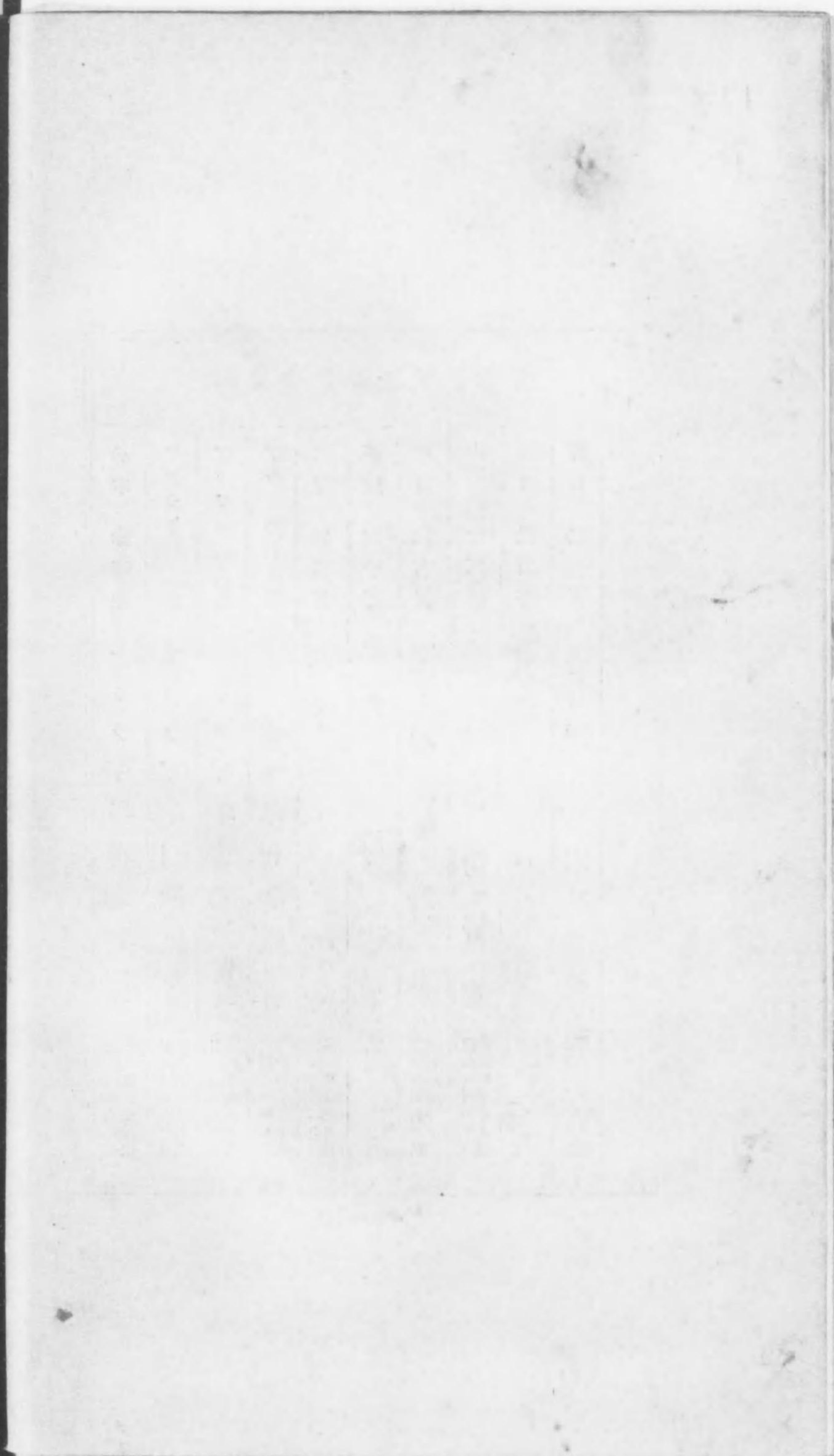
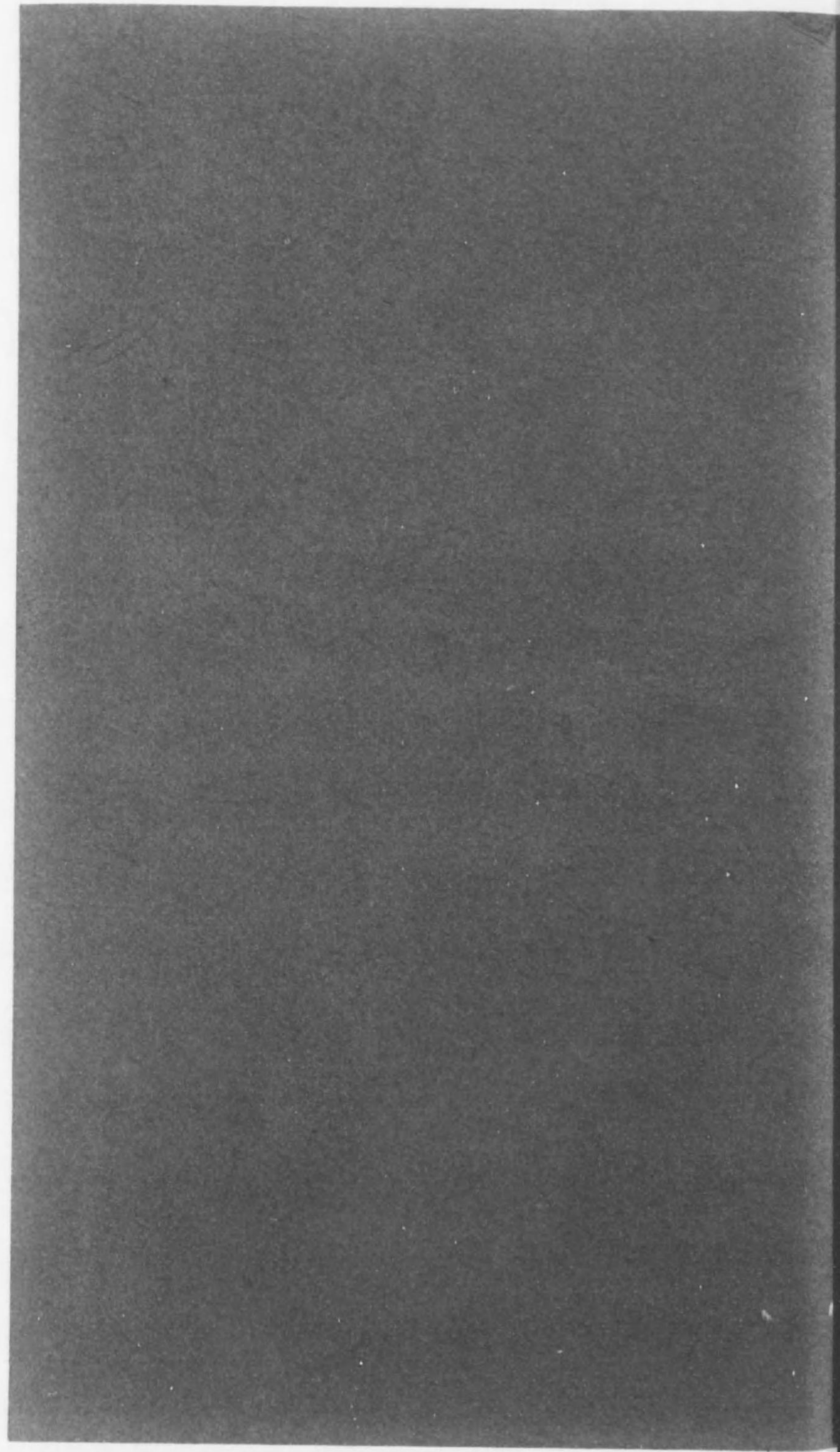


目書句俳歌詩店書波岩

東松露香校訂	遺稿	父の終焉日記	送料四十八錢
井手今滋編	橋曙覽全集	送料二圓八十錢	
大島花束編著	良寛全集	送料五圓七十錢	
正岡子規筆	版本仰臥漫錄	品切	
鳥木赤彦著	萬葉集の鑑賞及其批評	前編 送料二圓八十錢	
鳥木赤彦著	歌道小見	送料一圓五十錢	
太田水穂著	短歌立言	送料二圓二十錢	
鳥木赤彦著	集氷	送料二圓五十錢	
鳥木赤彦著	集柿	送料一圓五十錢	
中村憲吉著	集歌し	送料一圓八十錢	
藤澤古實著	集歌國	送料二圓六十錢	
	がらみ	送料一圓八十錢	
	陰集	送料一圓八十錢	
	魚言	送料二圓五十錢	
	原	送料二圓八十錢	

目書句俳歌詩店書波岩

鳥木赤彦編	アララギ年刊歌集第一	送料一圓五十錢
アララギ同人編	アララギ年刊歌集第二	送料一圓五十錢
アララギ同人編	アララギ年刊歌集第三	送料一圓五十錢
アララギ同人編	アララギ年刊歌集第四	送料一圓五十錢
木下利玄著	木下利玄全歌集	送料二圓八十錢
茅野雅子著	集歌金	品切
夏目漱石著	漱石俳句集	送料一圓五十錢
寺田・松根・小宮著	漱石俳句研究	送料二圓二十錢
夏目漱石著	漱石詩集附印譜	送料二圓十八錢
島田忠夫著	童謡詩柴木集	送料一圓七十錢



357  
139

終